

サークルとしての探検行為

藤 本 幸 一

マスコミにあおりたてられた「探検ブーム」が始まって久しいが、これとは逆に地理的探検時代は終りを告げ、今や「探検」という行為自体の存在性、あるいは可能性がうんぬんされている。

我が関大探検部も過去15年の歴史において行なわれてきた行為も、今日、技術面、フィールド面で一つの過渡期を迎え「探検」の多様化と共にその方向性が問われてきている。今や我々は、サークル活動としての行為と「探検」という大矛盾を抱括しつつ探検的行為を行える必要がある。

過去に、いわゆる探検部の特異性のゆえに行なわれていた行為が、大衆の手にとどき、「レジャー」化した今日、我々は「探検」の広義解釈と、過去から築き上げられた技術応用による新たな行為とに、今後の活路を見出してゆかねばならない。

また同時に冒険であれ、学術調査であれ、それらのものが社会に与える影響、つまりいかに社会に還元されるかということを考えてゆかねばならない。

学生としての純粋な行動がいかに社会性を含むか。画一化され、ゆとりを喪失した現代社会において、無償の行為に熱中する若者が単なる遊びではなく、あくまで真剣な姿勢と、それを裏付けする技術。それは、現在あらゆる分野で問題となっており、強いては物質文明の価値感への問いかけである。無気力人種に対する啓発なのだ。つまり我々は、このような行為を唯単にナルシズム的現象に終らさず、探究心と可能性への挑戦をもって大衆あるいは社会に対し問いかけ、ある意味での

文化の先駆となり得るべきものへと志向すべきなのである。

また、矛盾に満ち、ヘドロ化した状況を客体化し、自らに、その本来の価値感を備えるべく手段としての行為を「探検」と呼ぶのは飛躍であろうか。山、海、河、大地、空、そして人間。あらゆる対象は我々の前に横たわっている。

次のサークルとして探検行為を行なっていく上で忘れてはならないのは、一般的なサークルとしての問題である。

本来、大学サークルの持つ意義は、その社会性と、課外活動としての学生の人格形成の場としてある。つまりマスプロ化された大学において学友間の真のコミュニケーションの場としてサークルを設定しなければならない。そのためにはサークルの持つ閉鎖性を克服し、部員に対し最大限の許容性を持たせなければならない。この許容性の範囲と関大探検としての行動との接点を見出すことが、探検部におけるサークルと個人という問題を解決するであろうと思われる。閉鎖性を除き、許容性を持つということは、サークルをサロン化させることではない。あくまでサークルの独自性を守り、常に前向きに、物事に対処してゆかねばならない。

そして探検部の生命は、サークルとしての責務と本来の探検活動との二面性を消化できずには何らありえない。
(法学部4回生)

* * * * *